

違いをこえたスポーツの実現

太成学院大学 長谷川ゼミ チームB

○小西 陸 角田 遼 大井川 球道 大野 裕輝

目次

- 緒言(背景・目的・方法)
- 現状(文献調査・質問紙調査・インタビュー調査)
- 提言
- まとめ
- 参考文献

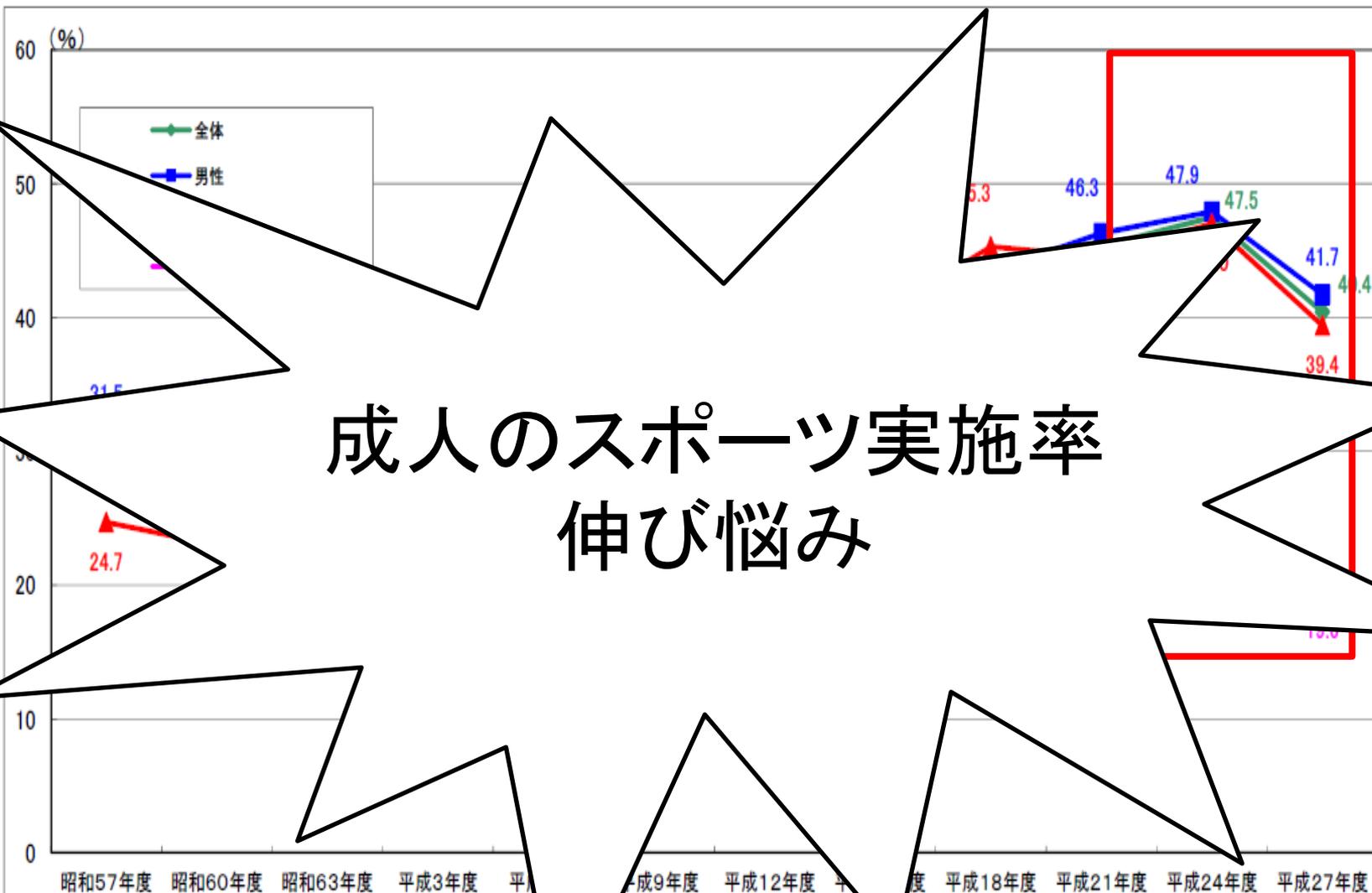
定期的な運動・スポーツ実施率の年次推移-1



注) 2014年調査までは20歳以上を調査対象としているが、2016年調査は18・19歳を追加した。

資料: 笹川スポーツ財団「スポーツライフに関する調査」2016 (p.75【図1-4】)

定期的な運動・スポーツ実施率の年次推移-2



成人のスポーツ実施率
伸び悩み

(出典) 体力・スポーツに関する世論調査(平成24年度まで)

及び「東京オリンピック・パラリンピックに関する世論調査(平成27年度)」に基づく文部科学省推計

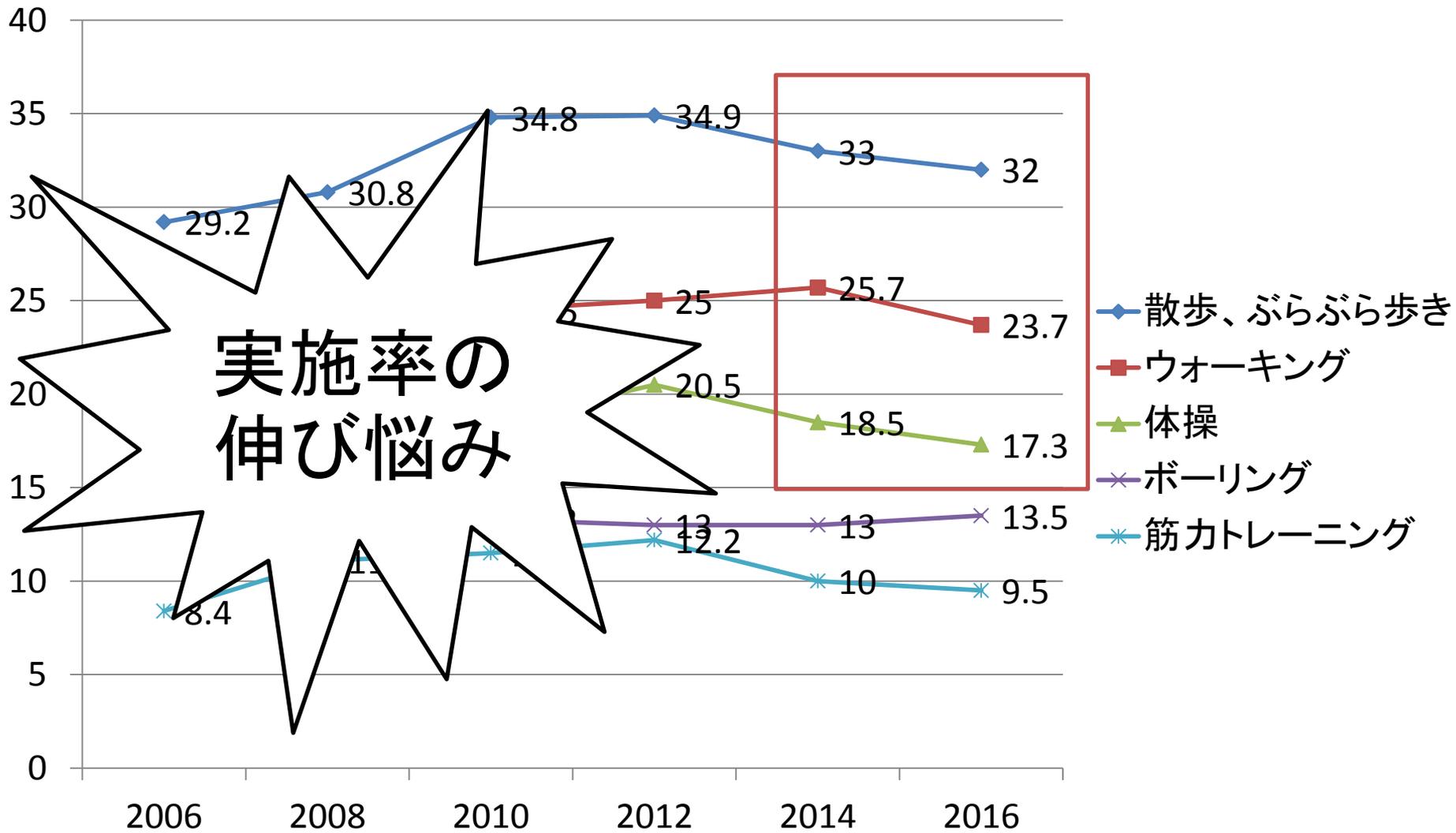
背景

順位	2006年	2008年	2010年	2012年	2014年	2016年
1位	散歩(ぶらぶら歩き)	散歩(ぶらぶら歩き)	散歩(ぶらぶら歩き)	散歩(ぶらぶら歩き)	散歩(ぶらぶら歩き)	散歩(ぶらぶら歩き)
2位	ウォーキング	ウォーキング	ウォーキング	ウォーキング	ウォーキング	ウォーキング
3位	体操(軽い体操、ラジオ体操など)	体操(軽い体操、ラジオ体操など)	体操(軽い体操、ラジオ体操など)	体操(軽い体操、ラジオ体操など)	体操(軽い体操、ラジオ体操など)	体操(軽い体操、ラジオ体操など)
4位	ボウリング	ボウリング	ボウリング	ボウリング	ボウリング	ボウリング
5位	カトレニング	筋カトレニング	筋カトレニング	筋カトレニング	筋カトレニング	ウリング

個人種目

用具・場所を必要としない

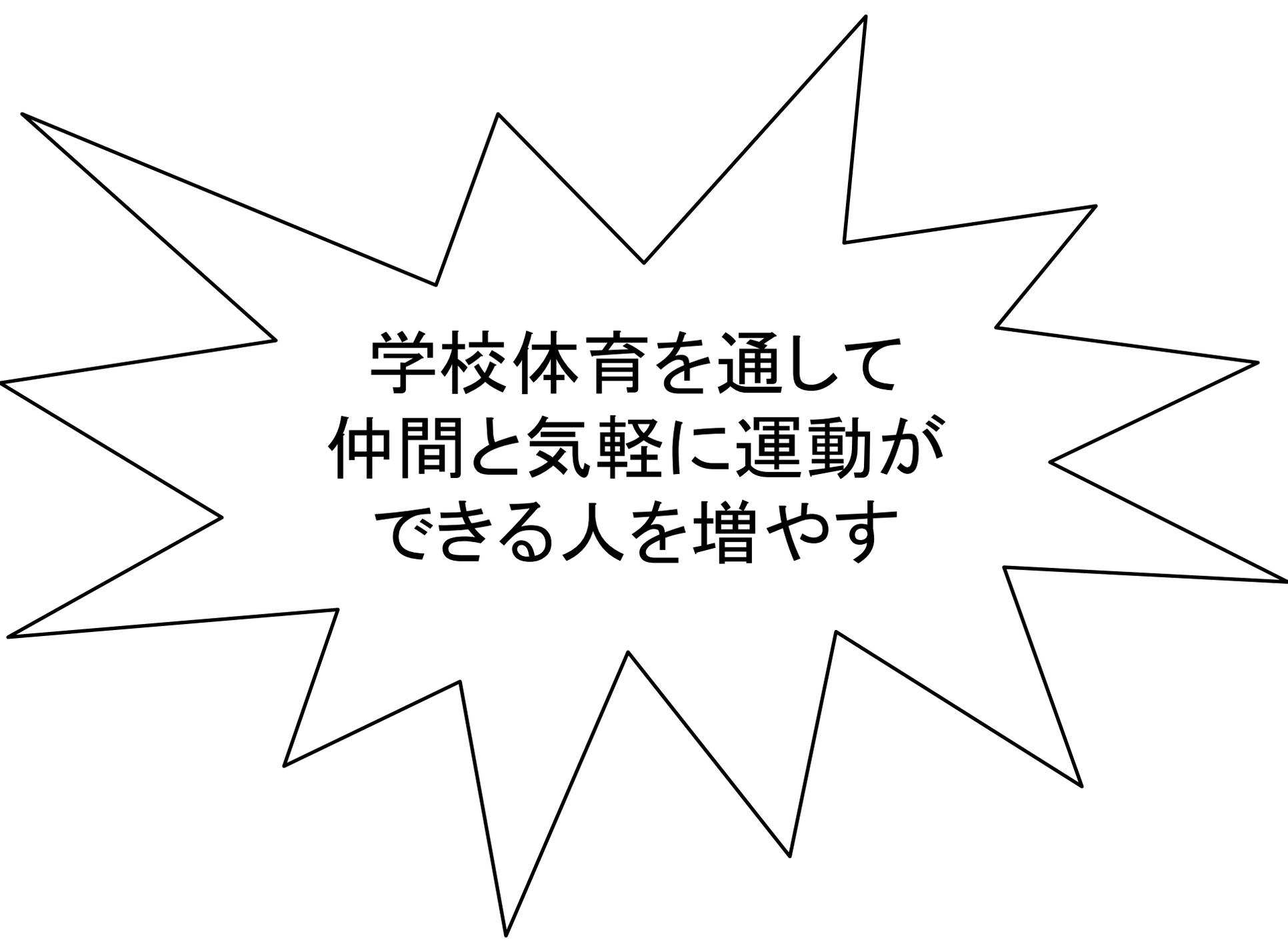
種目別運動実施率



「生涯にわたる豊かなスポーツライフ」の実現

●保健体育科カリキュラムは4年間を指導内容のまとまりとしてとらえる。

- ① 各種の運動の基礎を培う時期（小1～小4）
- ② 多くの領域の学習を経験する時期（小5～中2）
- ③ 卒業後も運動やスポーツに**多様な形で**
かかわることができるようにする時期（中3～高3）



学校体育を通して
仲間と気軽に運動が
できる人を増やす

ダイバーシティ

問題点

- 権利ばかりを主張し、義務を果たさない社員が出てくる
- 既得権をもった一部の社員から反発の声が出る
- 同質の人達を集めたほうがよいのではないかという疑問の声が出る
- 公正、公平な評価と連動していないと、不平等感を訴える社員が増える
- 多様性を尊重しすぎて合意形成に時間がかかり、意思決定が遅くなる

男女共同参画社会

問題点

- 格差を示す国際的な指標で非常に低い順位
(ジェンダー・ギャップ指数0.651で135カ国中98位)。
- 民間・地方の幅広い協力を得ながらも、依然として国が中心になって改
目指す段階
- 男女共同参画における都市部と地方との格差が拡大しつつあり、とりわ
け地方の特性を考慮した推進が課題。

異質の人とかかわることに関して壁がある

社内運動会が再燃

(神奈川新聞 平成27年 10月19日 月曜日)

社内運動会。どこが昭和の雰囲気を感じさせる。伝統行事が、再燃している。人間関係の希薄化が指摘される中、年齢や性別、役職を越えて一丸になれると注目されている。スポーツの秋。グラウンドや屋内施設を駆け回っているのは子どもばかりではない。大人が主役の運動会が各地で開かれている。

(田中 大樹)



4日、パシフィコ横浜(横浜市内西区)の展示ホールは熱気に包まれていた。外食大手コロワイドグループの労働組合が開催した運動会だ。7回目を数え、家族を含めて約250人が参加。グループ傘下の2社の労組が紅白2チームに分かれ、12種目で競い合った。

大人たちが「ゼー」の掛け声とともに息を合わせて大縄跳びに挑戦し、綱引きでは一進一退の攻防を繰り返した。障害物競走では子どもらの力走に拍手。最後を飾りリレーでは走者の名前や「がんばれ」という声援が飛び交い、勢い余って転倒



米司 隆明 代表理事

社内運動会が再燃

するプロ集団だ。2007年の設立後、当初請け負った運動会は年に数件だったが、昨年は約130件に上り、今年は150件を超える。2000〜5000人規模を中心に全国から依頼があり、県内では横浜スタジアムや横浜アリーナを会場に手掛けたこともある。

11月、横浜銀行(同市内西区)は大和市内で運動会を開く。創立95周年の節目に合わせて従業員組合と共同で開催し、行員をはじめグループ会社の社員や家族など3千人規模を想定。本部と9ブロックの10チーム対抗で、玉入れや大玉運びリレーなど7種目に挑む。「職場の一体感や人脈形成などを図り、組織力や若手育成メインの強化につなげたい」と同行。コスト削減で中断し、1994年以来、21年ぶりの開催だ。

米司隆明代表理事は「運動会には企業が抱える課題を解決する力がある」と強調する。仕事のやりとりはメールが中心となり、終業後の「ちよっと一杯」もままならないという昨今。運動会によって社内のコミュニケーション不足を解消し、風通しの良い組織を築くことができる。さらにモチベーションが高まり、業績向上や離職率抑制につながることも他社と差別化でき、優秀な人材確保も図れるという。

「社内運動会は時代とともに変化してきた。米司代表理事が指摘する。最近では2008年のリーマンショック後、割高な社員旅行に代わる社内行事として開かれるようになった。東日本大震災後は「絆」をテーマに掲げるケースが増加。「アベノミクス」の影響か、ここ1、2年は大規模な運動会が増えている」という。ただ、バブル期のような単なるレクリエーションではなく、課題解決のために開かれているのが特徴だ。「費用を掛けても開催する。運動会の投資効果の大きさを物語る」

「恥ずかしいからと当初は乗り気でなくても、体を動かす、声を出すうちに楽しくなる。足を引っ張らないようにと責任感が出て、やがてチームに愛着がわき、一体感が生まれる。職場だけでは分からないリーダー資質などの内面を知ることでもでき、効果は計り知れない。目的やクライアントの要望に合わせて競技の種類やチーム編成などに工夫を凝らし、リピート率は9割に上る好評ぶりだ。」

幼稚園や保育園時代から運動会に親しみ、「日本人のDNAが運動会を欲している」と米司代表理事。目標は大きく世界を見据え、「運動会には認められた可能性がまだまだある。外資系企業でも高い評価を得ており、優れた日本文化として海外にも広めたい」。



一体感、業績向上…

課題解決に効果

目的

男女共習体育
の
積極的な実施

研究方法

● 文献調査

- ・北田豊治「体育科教育における男女共習型授業に関する研究」『愛知学院大学教養部紀要』第53巻1号, 2006
- ・山西哲也「男女共習体育授業の実現の可能性と問題」『中国四国教育学会教育学研究ジャーナル』第6号, 2010
- ・植月文隆・富岡元信他「男女共習授業についての検討」『東京体育学研究』1998

● 質問紙調査

- ・T学院大学 健康スポーツ学科1年生

● インタビュー調査

- ・大阪府立F高等学校体育教員
- ・元中学校保健体育教員

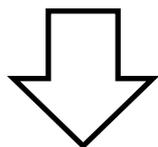
現状①

山西(2010)

○男女共習体育の実施率

→60%

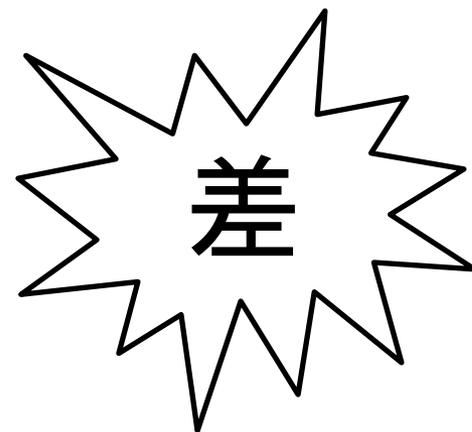
〈参考〉69.3%(T学院大学, 2017)



○男女共習体育の都道府県別実施率

→88.3%(神奈川県高等学校)

→8.3%(大阪府高等学校)



現状②

生徒の理想と現実

理想

共習で行いたい

→「リレー」「バレーボール」

「サッカー」

集団種目

「バレーボール」(北田2006)

差

現実

共習で行っている

→「長距離走」「短距離走」「水泳」「器械体操」

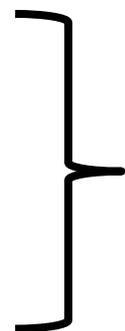
「体づくり運動」(T学院大学1年次生)

個人種目

教員の意識

○男女共習授業を実施した場合の効果

生徒の課題解決能力
仲間と協力する態度
安全性への配慮



向上する

男女共習体育実施に向けた課題

- 体格差
- 能力、体力差の指導
- 安全性の確保
- 評価の仕方
- 種目選択
- ルールの作成

男女共習体育の方法を
4つのステージに分類し
実施のしやすさから
段階的に発展する方法を提案

提言

4つのステージ



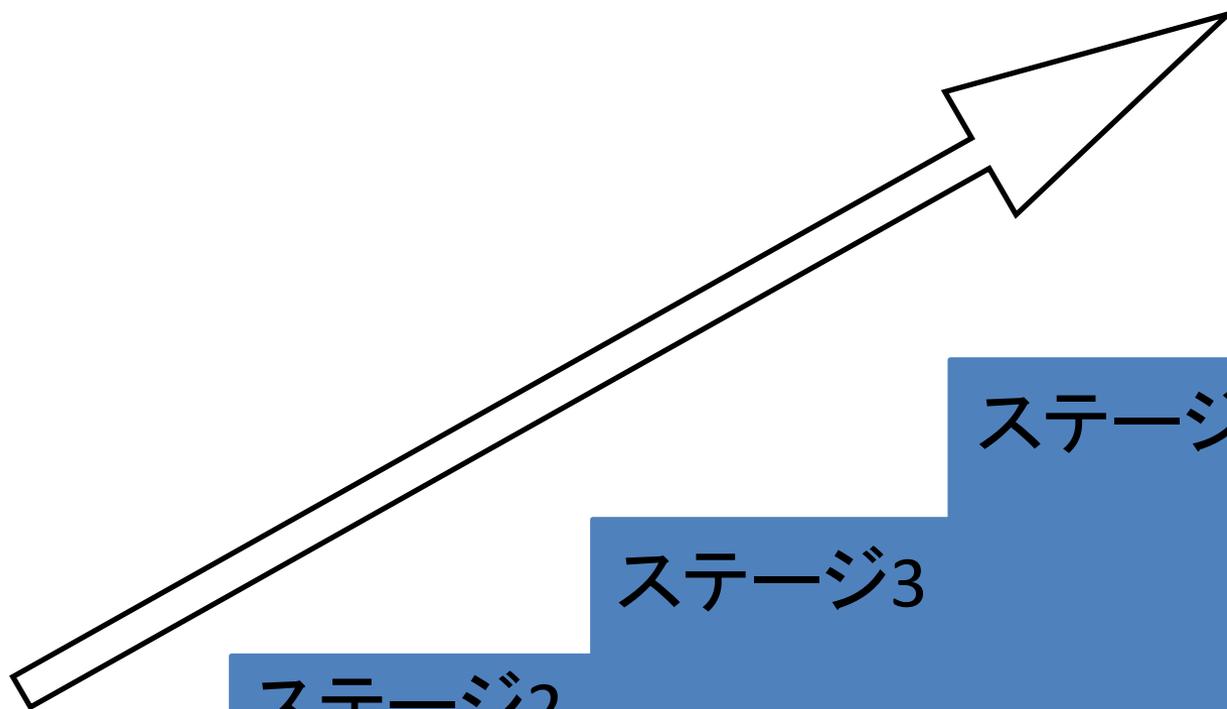
ステージ1

ステージ2

ステージ3

ステージ4

共習



別習

ステージ1

○競技以外での共習

男女が一緒に取り組む過程として、最初から混合競技に入るのではなく、一緒に活動することから始めることで、男女が一緒に活動するという事に慣れさせる。

また、男女が一緒に活動することの楽しさを覚える。

実施例：男女が共に準備、集合、準備運動

振り返り活動、目標を立てる

取り組み方(技の行い方など)

実施上の配慮：男女で取り組む楽しさ、意味をしっかりと指導するようにする

ステージ2

○得点などの競い合い

男女で交互にシュートなどをし、男女で競い合う機会をつくる。直接一緒に競技をするのではなく、個人の能力を生かし、その結果を男女で競い合うことで競い合う楽しさなどを知る。

実施例：1.バスケットボールでのフリースロー

2.サッカーでのPKなどのシュート率を男女で競う

実施上の配慮：体格差の伴わない技術の競い合いを取り入れる

ステージ3

○ノンコンタクトでの男女混合チームの競い合い
男女混合のチームを作り、接触のない競技を男女ペア同士で競い合う。

男女で協力すること、男女での競い合い方、混合種目の楽しみ方などを知る。

実施例：テニス、バドミントン、卓球、バレーボール

実施上の配慮：男女の比率が同じ割合でチームを作る

ステージ3→4への移行

可能と考える種目について → アルティメット

- 理由 →
1. 接触がないポジションがある
 2. 接触がないポジションを女子とし
男女でチームが組める
 3. 技術を主体とする

ステージ4

○コンタクト種目の男女混合チームの競い合い
男女混合のチームを作り、接触のある競技を男女ペア同士で競い合う。

男女での接触のある競技の方法、配慮の仕方、楽しむ方法、協調性、積極性、団結力を学ぶことができる

実施例：バスケットボール、サッカー、ソフトボール
ハンドボール

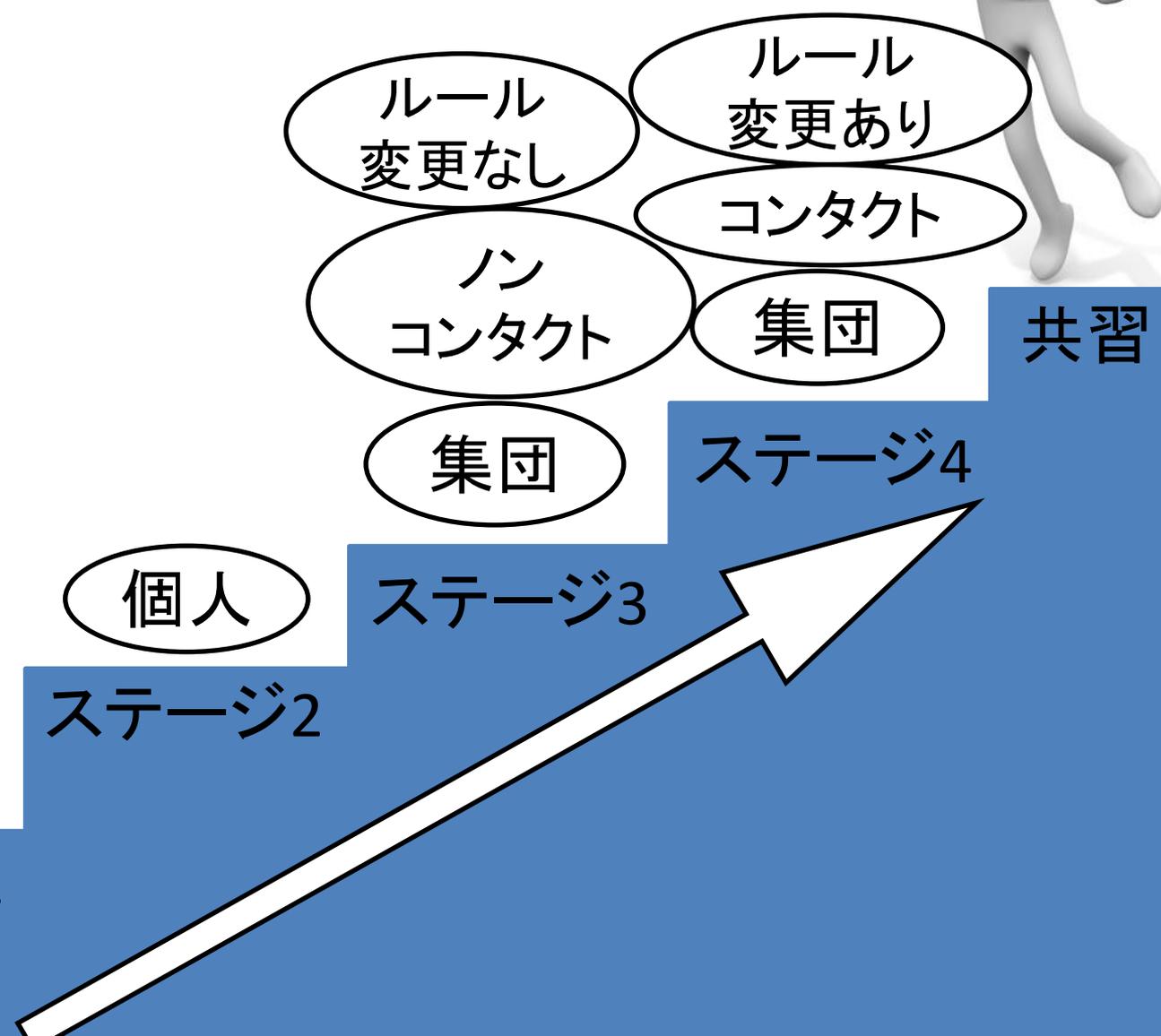
実施上の配慮：ルールの変更、人数配分

ステージ4の課題と利点

課題→体格差、能力差、体力差
→安全性

利点→ 1.ルール変更がしやすい
2.コミュニケーションの機会が多い
(ルールを自分たちで作る、作戦会議)

4つのステージ



まとめ

個人種目が多く実施されている中、学校体育の段階で集団種目を通して能力差などの違いが大きくてもスポーツを楽しむことができるということを学んでおくことで、将来的に多様な人と集まって抵抗なくスポーツを行うことができることが期待できる。

また違った人たちが社会で共存すること、合意形成をスムーズにすることなどが期待できる。

参考文献

- 神奈川新聞「Monday 経済 社内運動会が再燃」2015年10月19日
- 北田豊治「体育科教育における男女共習型授業に関する研究」『愛知学院大学教養部紀要』第53巻1号, 2006
- 笹川スポーツ財団『スポーツ白書』2017
- 白旗和也『新しい体育の授業PLUS』平成29年版 学習指導要領改訂のポイント 小学校中学校 体育・保健体育
- 植月文隆・富岡元信他「男女共習授業についての検討」『東京体育学研究』1998
- 山西哲也「男女共習体育授業の実現の可能性と問題」『中国四国教育学会 教育学研究ジャーナル』第6号, 2010

ご清聴ありがとうございました